

加藤周二

夕陽去語

夕陽妄語

加藤周一

夕陽妄語

一九八七年四月二十二日第一刷発行

一九九〇年四月十日第六刷発行

著者 加藤周一

発行者 八尋舜右

印刷所 精興社

製本所 和田製本

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五ノ三ノ二

電話 〇三―五四五―〇一三一(代表)

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替 東京〇―一七三〇

ISBN 4-02-25569-4

©Shuichi Kato 1987 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

夕陽妄語・もくじ

夕陽妄語の辯	5
『薔薇の名』読後	11
敦煌所感	18
安危在是非	25
『イグナティウス・デ・ロヨラ』の余白に	32
『中野好夫集』再読	39
「若者向け」の文化について	45
軍拡・オモテとウラ	51
シャガール回顧	58
ミホ神社の神事	65
遙かなるニカラグア	71

日仏会議余聞	77
アカマタ・クロマタ	83
真夏の夜の(悪)夢	90
日伊比較事始	96
旅の小説三つ	102
'85年回顧	108
マラルメとブルースト	114
二つの映画——バルカン半島から	120
世論調査の天皇制	126
カトリック教会の役割	132
「いじめ」流行	138

所変われば	144
ウシユマルの遺跡で	150
歴史の見方	156
「統投」という比喻	162
タバコ（と酒）の害について	167
西遊記	174
「新国家主義」の年の暮れに	180
あとがき	187
装幀・田村義也	

夕陽妄語の辯

私は先に「山中人閑話^{さんちゆうじんかんわ}」と題して文章を綴^{つづ}ったとき、画家田能村竹田の『山中人饒舌^{じょうぜつ}』を想出していた。今「夕陽妄語^{せきやうもうご}」の語を用いるのは、いくらか詩人菅茶山の『黄葉夕陽村舎詩』を考え、新聞に載せるよしなしごとというほどの意味である。しかし「夕陽」についての私の思い入れは、それだけではない。

山の端に落ちる日と、夕陽に映えるヴェネツィアの太守の館を比較したのは、ブルーストである。私はしばらくそのヴェネツィアに住み、ザツテレの波止場の彼方の夕焼け空を眺めながら、ブルーストの小説の女主人公アルベルティヌが男にあてた最後の手紙のなかで、「あたりに夕闇^{ゆうやみ}が迫り、別れが近づいているので」、それが「二重の意味で夕暮れの」手紙であると書く条^{くだ}りを読んでいた。夕焼けの雲は、

真紅に燃えたかと思うと、忽ち黒味たちまがかつた暗い赤に変わり、その間に、はるかなメストゥレの工場の薄墨色の煙がたち昇っていた。古い石畳には、私自身の引く影が長かった。嘗て子供かつのときに見た西の空の色が俄に鮮やかに甦よみがえったのは、その瞬間である。

昔少年の頃、私は渋谷の高台の家の二階の窓から、町の低い屋根と、遠い山脈と富士の上に拡がった広い夕暮れの空を眺めていた。その空の色は、ある短い間に、薄墨色と赤との微妙に交錯した長次郎の楽の茶碗——いみじくもその銘に「夕暮」という茶碗——の肌の色合いに似る。その時が来るのを私は待ちながら、その時が来れば忽ちそれが過ぎ去ることを、予期していた——私はヴェネツィアで、そのいわばあらかじめ「失われていた時」を「再び見出した」のである。父の書齋にあった『万葉集略解』を——おそらくその他の本は外国語で私には読めなかったという理由で——私は披ひらいてみていたように思う。近江の海夕なみ千鳥……「いにしへ」を知るはずはもとよりなかったが、私は夕陽と日本語の美しさを、同時に発見していたのかもしれない。

旭日昇天の意気は、はじめから私には縁がなかった。今でも、出世、成り上がり、勢力拡張、狂信主義という種類のことを、私は好まない。私が好むのは、長い年月の間に樂の茶椀に滲み出す微妙な色調であり、沈みゆく町に沈む夕陽の最後の輝きであり、あらゆる価値に対する懷疑主義である。もし私の雜文に時節があるとすれば、その時節は夕暮れにちがいないだろう。

「妄語」は、兼好法師のいわゆる「心にうつるよしなしごと」である。しかし心にうつるものごとの他に、それをうつす心があるわけではない。心とは、常に、「何ものかについての心」である、とフッサールもいった。しかしよしなしごととは、フッサールの「何ものか」のように抽象的に、意識の対象一般を指すのではなく、より具体的に、知識ではない感想、証明ではない推論、必ずしも万人を説得しない（説得することを期待できない）当人の意見である。けだし意見とは、十分な証拠なくして抽きだされた結論であろう。その当たることを望むけれども、当たることを保証はできない。しかしまた意見なしに、人は生きることができない。

たとえば私は、日本の軍国化が、嘗てそうであったように将来にもまた、日本国

民に不幸をもたらすだろう、と考える。殊にその軍国化が、超大国間の争いの先棒をかつぐ形で行われるときには、なおさらである。しかしそういう結論を私が抽きだすのは、そのために十分な証拠をもっているからではなく、証拠が十分であろうとなかろうと、その事について何らかの結論を抽きだす必要がある、と考えるからにすぎない。これは蘇軾そしきのいわゆる「隙中之観闘」である。すなわちせまい隙間から人々の争いを見ているのだから、どっちが勝つか知れたものではない。——しかし確実に知ることができないのは、どちらが勝つかばかりでなく、どちらが正しいかでさえあるかもしれないのである。およそ政論はかくの如し。

芸術についての議論もまた、多くはこれに類するだろう。たとえば私が一枚のピエロ・デッラ・フランチェスカについて感想を綴るのは、私の心を動かすものの本体を、つまりは私自身の環境の構造を、つきとめたいと思うからである。その感想に、どの時代の誰でもが認めるであろうような根拠が、あるわけではない。

ヴェネツィアの居酒屋の店先の椅子にかけて、西の空を眺めながら、私の念頭に去来していたのは、たしかに「西方浄土」の観念ではなかった。私は「浄土」なる

ものを信じない。それが東方にないから、西方にあるだろうとは考えないし、現在が穢土だから、将来に浄土があり得るだろう、とも思わない。私の考えていたのは、「祖師西來の意如何」というほどのことである。眼のまえには運河があり、運河には遠い国から来た船が往来していた。私はなぜここまでやって来て、何故この椅子に坐っているのだろうか。

禪宗では、祖師がダルマであり、ダルマは西方から中国へ来た。近代日本の祖師もまた西方から来たのである。その意如何。何故西洋で近代文明が興ったのだろうか。何故それがアラビヤやインド中国では興らなかったのだろうか。またそれを受けとった側、殊に日本の側には、どういう条件があったのか。またその条件と関連して、将来の文明は、——もしそれが核兵器で一挙に破壊されないとすれば、——どこで、どういう方向へ、動いてゆくのだろうか。そういう大きな問題に、確かな答えを見つけることはできない。それどころか、今までのところ、説得的な仮説さえもみあたらないようである。しかしもう少し具体的で、もう少し小さい個別的な問題の意味も、その大きな問題との係わりで決まってくるにちがいない。

ヴァレリーもいったように、すべての文明は亡びる、スーザも、ペルセポリスも。しかしまだ亡びないうちは、われわれ自身の文明を考えるほかはないだろうし、生きているうちは、死よりも生を考えるほかはないだろう。我生を知らず、いづくんぞ死を知らんや。私は「論語」に賛成する。私は、夕暮れの文を作って、闇夜の文を作らない。

『薔薇の名』読後

昨年（一九八三）の暮れに、現代イタリア文学の英訳者として知られる米国人ウィーヴァ氏（William Weaver）が、トスカーナの丘の上の自宅で、その最近の訳業はウムベルト・エコ『薔薇の名』（Umberto Eco, *Il nome della rosa*, Bompiani, Milano, 1980）である、といった。「自分の興味から訳しはしたけれど、どうせ数千も売れないだろうと思っていた。ところが驚いたことに、それがベストセラーになってしまった……」

その頃ヴェネツィアに住んでいた私は、その本のイタリアでの評判を知らないではなかった。大学の学生たちに、最近のイタリアの小説の注目すべきものを尋ねると、誰でも第一に挙げたのが『薔薇の名』であったからである。国際的に有名な記

号学の理論家が、はじめて書いた小説、——それにはいくつかの異なる読み方が可能であろう、ということまでは、作者の芸術理論からも容易に想像できる。しかしそれは「ベストセラー」ということは、別の話にちがいない。

私はウィーヴァ氏の説明を聞いて、大いに好奇心を刺激されたが、身辺多事、英仏語訳を参照しながら私がその本を読んだのは、半年ほど後になってからである。

たしかに面白かった。現代の小説で、おそらくボルヘス氏の短編を除けば、知的にこれほど面白い小説を私は他に知らない、といってもよいだろう。その面白さの内容は、果たして多面的または重層的である。

頃は十四世紀前半、一三二七年冬の一週間。処^{とろ}は北イタリアのベネディクト派修道院。そこで毎日一人ずつ修道士が交死する。自殺か、他殺か。他殺であるとするれば、誰が犯人か。その調査に当たるのが、たまたまそこに来合わせて修道院長から調査を委託されたフランシスコ派の修道士である。彼は若い見習僧を助手として連れていて、小説はその助手が後になって書いた手記という形になっている。すなわち探偵小説仕立てであり、大いにシャーロック・ホームズの話（そこでも語り手は

助手のワトソン博士である）を思わせる——というよりも、ほとんどコナン・ドイルの「バロディー」として読むことさえもできる。主人公は、ここでも英国人であり、ロジャー・ペイコンの弟子で、一見めだたない事実の観察から、緻密な推論を重ね、語り手にとって（つまり読者にとって）意外な結論を導き出す。

歴史的な面に注目すれば、小説の興味は、修道院内の日常生活の詳しい叙述にあるだろう。食生活（たとえば、誰が「フォーク」を使いはじめていたか）から、性生活（同性愛と近くの村の娘との交渉）を通して、知的生活（共通語としてのラテン語、神学的な論争）まで。修道院外の歴史的状況が修道院内の人間関係に反映していることは、いうまでもない。殊にたとえば、アヴィニヨンの法王と神聖ローマ皇帝との権力の対立、宗教裁判と異端弾圧、その間にあってのフランシスコ派の微妙な立場などである。元異端裁判所審問官で、皇帝に近いフランシスコ派の主人公が、修道院長をはじめ多数の修道士たちと行う長い対話は、——それが小説の大部分のページを占め、直接に変死事件の調査と係わるところは少ないが——中世思想史の興味深い一断面を示す。

しかし十四世紀の神學論争は、單に歴史的な興味をよびますだけではなく、また現代の知的問題とも係わっていて、その意味でも挑発的または刺激的である。たとえば、修道院長は、主人公が犯罪事件について語りながら「惡魔の働きという原因」に触れないのは何故か、と訊く。その問いに対する主人公の答えは、原因と結果についての推理はむずかしすぎる、というのである。「因果論の連鎖をさかのぼればきりが無い、調査は、觀察することのできる事實の確認に限られるだろう」
(三八—三九ページ)

しかし觀察することができるのは、個別的で特殊な場合である。ある藥草が特定の病人を治すという事實の觀察から、同じ藥草が同じような別の病人を治すだろう、という命題（法則）を抽きだすためには、觀察（經驗）だけでは足りず、自然法則の普遍性を前提としなければならない。しかるに、と主人公はいう、普遍的な自然法則の存在は、その法則が神をも束縛することを意味し、したがって神の絶対的な自由と矛盾する。「だから私は、私自身が信じている真理さえも不確定なものだと感じるのだ」(二一〇ページ)